

ウィリアム・カーロス・ウィリアムズの “The Yachts” について

小 西 康 雄

アメリカの現代詩人、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズを論じる場合、必ずと言っていいほど引き合いに出されるのが、“The Red Wheelbarrow”⁽¹⁾である。

so much depends
upon

a red wheel
barrow

glazed with rain
water

beside the white
chickens.

2行4連から成るこの短い詩は、各行を構成する語数も極度に少なく、各連の1行目は3語、2行目は1語で出来ている。ウィリアムズは、身辺にある平凡

な風景の一部を切り取って、そこに存在する事物に強烈な集中力を注ぐ。この詩にあるのは、ただ、「たくさんのも (so much)」と「赤い手押／車 (a red wheel／barrow)」と「白い／ニワトリたち (the white／chickens)」だけである。ウィリアムズは、対象となるこれらの事物を、透徹した眼で捉え、虚飾を捨て情緒や感情を排した即物的な表現によって、これらの事物のありのままの姿を呈示している。極度に短い各行は、情念などの入り込む隙間もなく、無機的な世界を創り上げる。言わば、裸の言葉によって、事物の本質的な存在の仕方が、再構築されるのである。

観念や思惟を拒否し、対象となる事物そのものの裸の姿を、極端に切り詰めた筆致で即物的に描いたこの “The Red Wheelbarrow” は、ウィリアムズの詩の一つの典型である。しかしながら、これだけがウィリアムズの詩の世界ではない。本稿では、この詩とはやや趣を異にする “The Yachts” を採り上げて、若干の考察を試みることにする。

“The Yachts” は、1935年に *The New Republic* 誌に発表され、後に、同じ年に発行された詩集 *An Early Martyr* に収められた。3行11連から成るこの詩は、タイトルが詩に繰り込まれていて、ここからすでに詩が始まっている。

The Yachts

contend in a sea which the land partly encloses
shielding them from the too-heavy blows
of an ungoverned ocean which when it chooses

tortures the biggest hulls, the best man knows
to pit against its beatings, and sinks them pitilessly.

Mothlike in mists, scintillant in the minute

一見して判かるように、先の “The Red Wheelbarrow” などに較べると、1行を構成する語数もはるかに多く、筆致も叙述的で物語風である。

冒頭のこの二つの連で、ヨット・レースが行なわれる海が描写される。この海は陸地で一部を囲まれた穏やかな入江で、その陸地が暴虐な力を秘めた外海からヨットを守っている、というのである。タイトルの “The Yachts” から始まったセンテンスは、第2連の2行目まで、全体で5行にわたっているわけだが、この部分は、ウィリアムズの詩の特質の一つを示している。対象となる事物を描く場合、ウィリアムズは、巧みな切行の仕方によって各行に一つのまとまった意味を持たせ、その各行を積み重ねていくことによって、事物の在り方を、求心的に描写しようとする。この好例は、“At the Ball Game” の冒頭の2連に見られる。

The crowd at the ball game

is moved uniformly

by a spirit of uselessness

which delights them——

第1連の1行目で、対象となる「球技を見ている観衆」を呈示し、2行目で、その観衆の属性とも言うべきものを「画一的に動かされる」と述べる。さらに、第2連の1行目で、その属性を生み出すのは「無益な気分によって」であるとし、2行目で、この気分が「観衆を喜ばせている」のだと述べる。切り詰められた短いこの4行は、それぞれの行に単一の概念を持ち、これが重なって⁽²⁾いって、対象である「観衆」の本質をえぐり出すのである。

“The Yachts” の冒頭の二つの連も、各行がこれほど切り詰められていないために厳密な形はとっていないが、この筆致と似ている。タイトルで、先ず、「ヨット (The Yachts)」が呈示され、第1連の1行目で、そのヨットが競い合うのは「陸地が一部を取り囲んでいる海 (a sea which the land partly

encloses)」であることを述べ、2行目で、その陸地が「あまりにも激しい打撃からヨットを守っている (shielding them from the too-heavy blows)」とし、3行目で、この打撃は「手に負えない外海 (an ungoverned ocean)」のものと述べる。センテンスはそのまま第2連へつながって行き、1行目と2行目で、この海は「どんなに大きな船をもひどく苦しめ (tortures the biggest hulls)」て、「情け容赦なく沈めてしまう (sinks them pitilessly)」と語られる。タイトルを含めて6行にわたるこの長いセンテンスは、途中分断されることなく、巧みな切行の仕方によって、ヨットを浮かべている穏やかな海が密かに持つ狂暴さを、漸層的に、求心的に示し、この詩のこれからの内容を予測させるものである。

ウィリアムズは、音節数の少ない語、とくに単音節語を、好んで用いる。これらの語が連続して迅速に流れていく行の中に、多音節語が現われると、リズムに微妙な変化が生じることになる。ウィリアムズは、音節数の少ない語の間に多音節語を時折置くことによって、リズムの上で巧みな効果を生み出している。しかも、このように用いられる多音節語には、意味の上からも重要な語が選ばれ、さらに大きな効果が生じることになる。先にあげた “At the Ball Game” の冒頭の箇所でも、ほとんどが単音節である語の中に置かれた二つの多音節語、“uniformly (画一的に)” と “uselessness (無益)” とが、「観衆」の属性を、リズムの上からも意味の上からも、際立たせている。

この場合と同じように、“The Yachts”のこの部分においても、第1連3行目の “ungoverned” と第2連2行目の “pitilessly” との二つの多音節語が、音節数の少ない他の語の中であって、リズムの流れに微妙な変化を生じさせている。また、この二つの語は、それぞれ、「手に負えない」海、船を「情け容赦なく」沈めてしまう海、というこの詩全体にとって重要な意味を持つ語でもある。とくに “pitilessly” は、タイトルから始まって6行にわたる長いセンテンスの最後に置かれており、語頭にストレスを持つ4音節のこの語のリズムは、この語の意味とあいまって、重く不気味な雰囲気をもたせようとしている。

第2連の1行目 “tortures the biggest hulls, the best man knows” には、統語上の二重性が、したがって面白さが、ある。“the best man” が、“tortures” の目的語であると同時に “knows” の主語にもなっているのである。つまり、海は「どんなに大きな船をも、どんなに巧みな乗り手をも、ひどく苦しめる」という読み方と、「巧みな乗り手なら知っている」という読み方が、同時に可能なのだ。これもウィリアムズの技法の一つである。

ヨットを浮かべている一見のどかな海が、実は、狂暴さを密かに抱いているのだという冒頭の部分に続いて、第2連3行目から次の第3連と第4連にかけて、ヨットが詳細に描写される。

brilliance of cloudless days, with broad bellying sails
they glide to the wind tossing green water
from their sharp prows while over them the crew crawls

ant-like, solicitously grooming them, releasing,
making fast as they turn, lean far over and having
caught the wind again, side by side, head for the mark.

先の第2連3行目 “Mothlike in mist, scintillant in the minute” の [m] 音の頭韻が、のどかで柔らかな印象を与え、次の行、つまり第3連1行目 “brilliance of cloudless days, with broad bellying sails” の、明かるい [b] 音の頭韻や、流麗な [l] 音の繰り返しが、陽光に明かるく輝やく華やかなヨットの描写に、一層の効果を生み出している。このヨットの描写は、第4連で、ヨットを操っている乗組員のきびきびした動きの描写に移っていく。

第2連3行目の最初の語 “Mothlike” について、Welland は、美しいヨットが束の間のはかないものであることをこの語が連想させる、と述べている⁽³⁾。たしかに、“moth” という言葉は、死を連想させ、無意味なことをして身を亡ぼして死んでいく哀れさを比喩的に表現する語とされている。しかし、こ

ここで考えなければならないのは、ウィリアムズの基本的な特質である。ウィリアムズは、対象となる事物に強烈な集中力を注ぎ、具体的に即物的にそれを呈示する。彼の描く「手押車」や「一枚の紙切れ」は、あくまでも「手押車」や「一枚の紙切れ」そのものであって、それ以上のものでもそれ以下のものでもない。そこには抽象的概念や象徴はない。ウィリアムズは、伝統や既成概念にとらわれずに、むしろそれを拒否し、言葉を裸のまま駆使して、事物のありのままの姿を描写するのである。したがって、ここで用いられている“Mothlike”という言葉も、伝統的な意味を含んだ比喩的な言葉と考えるには問題がある。「広い帆をふくらませて (with broad bellying sails)」 「きらきら光っている (scintillant)」 ヨットが、「蛾のよう (Mothlike)」 だと、きわめて具体的に明確に述べているのであって、この言葉は、ヨットの上できびきび働いている乗組員たちを「蟻のよう (ant-like)」 とだ述べているのと同様、対象のありのままの姿を具体的に表現している語ととるべきであろう。

続く第5連と第6連では、ヨットがさらにはでやかに描写される。

In a well guarded arena of open water surronuded by
lesser and greater craft which, sycophant, lumbering
and flittering follow them, they appear youthful, rare

as the light of a happy eye, live with the grace
of all that in the mind is fleckless, free and
naturally to be desired. Now the sea which holds them

今はまだ恐怖など感じられない「よく守られた海の競技場で (In a well guarded arena of open water)」 大小さまざまな船にかしずかれるように取り囲まれているヨットは、「若々しく見え (appear youthful)」 「優美に生きている (live with the grace)」 のである。この二つの連では、[f] 音と [l] 音が頻繁に現われるが、この音の響きも、柔らかで流麗な雰囲気醸し出している。

第5連の1行目は前置詞“by”で終わっているが、これも、ウィリアムズの手法の一つである。ウィリアムズは、行末に、この場合のような前置詞、あるいは冠詞や代名詞の所有格といった、当然後に何らかの言葉をとる語を、置く場合がある。この切行の仕方は、次に来る言葉を期待させ、行間に緊迫感を生み出すことになる。

これまで続いてきた若々しく華やかなヨットの描写は、第6連3行目の途中から一転して海の描写に変わり、次の第7連と第8連で、それまで言わば離れた関係で描写されてきたヨットと海とが、一つにからみ合って、緊迫した関係を作り上げ、やがて、この詩の頂点に達していく。

is moody, lapping their glossy sides, as if feeling
for some slightest flaw but fails completely.

Today no race. Then the wind comes again. The yachts

move, jockeying for a start, the signal is set and they
are off. Now the waves strike at them but they are too
well made, they slip through, though they take in canvas.

第6連と第7連とのつなぎ方，“Now the sea which holds them/is moody”は、センテンスの主部で連を言い切って、次の連をその主部を受ける述部で始めるやり方である。このように連と連との間でセンテンスを分断することによって、そこに期待感や緊迫感が生じ、同時に、二つの連が有機的に流動的につながっていくことにもなる。先の第1連と第2連との間にも、上の第7連と第8連との間にも、同じことが言えるが、これもまた、ウィリアムズがよく用いる技法の一つである。

「ヨットを浮かべている海 (the sea which holds them)」は「不機嫌 (moody)」で、「ほんの些細な欠点をも捜すかのようにヨットの船腹をなめまわしている (lapping their glossy sides, as if feeling/for some slightest

flaw)」のだが、まだ、「まったく手の出しようがない (fails completely)」のである。海は、ヨットを破滅させようと密かにねらっているのもあって、自然が、人間の創造物に対して、さらには人間に対して抱いている悪意がうかがわれる。

これまで、各センテンスは何行にもわたって長く続いて出来ていたのに対し、第7連3行目 “Today no race. Then the wind comes again. The yachts” では、短いセンテンスが並置されている。これまでのゆったりしたテンポが崩れて極度に迅速なテンポに変るこの行の構成は、この詩のこれからの激しい動きを予測させる。

ヨット・レースがいよいよ始まる。「波はヨットに打ちつける (the waves strike at them)」が、「ヨットは実によく出来ていて (they are too/well made)」巧みに「波間をすべっていく (slip through)」のである。海は、第7連ではヨットのなめらかな船腹を「なめまわして (lapping)」いると描かれたが、ここでは「打ちつける (strike at)」と述べられ、海とヨットとの関係が次第に緊張したものになってくる。そして、続く最後の三つの連で、この詩は頂点に達する。

Arms with hands grasping seek to clutch at the prows.

Bodies thrown recklessly in the way are cut aside.

It is a sea of faces about them in agony, in despair

until the horror of the race dawns staggering the mind,

the whole sea become an entanglement of watery bodies

lost to the world bearing what they cannot hold. Broken,

beaten, desolate, reaching from the dead to be taken up

they cry out, failing, failing! their cries rising

in waves still as the skillful yachts pass over.

狂暴な恐ろしさを秘めた海と華やかで優美なヨットとの間の微妙で不気味な均衡が、ここで一挙に崩れる。第9連の1行目と2行目は、いずれも1行が1センテンスで完結していて、それまでの何行かにわたってセンテンスが続く場合に較べて、断定的な鋭さがあり、意味に即した構造になっている。この鋭い動きの内に、この詩は、突如、死と恐怖の世界の描写になだれ込んでいく。海に投げ出されて必死にへさきをつかもうとする手、ほうり出される死体。“Bodies”には、ヨットの「船体」とほうり出された「死体」との両義があると解してよかろう。ウィリアムズは、転覆したヨットに死を見ているのである。第9連3行目の“a sea of faces”は、「多数の顔」という比喩的な表現であると同時に、「あちこちに顔が浮かび漂っている海」という文字どおりの表現でもあって、巧みな言葉の用い方である。⁽⁴⁾

第9連に続いて第10連では、恐怖と死の混沌とした世界が現われる。1行目の“the horror of the race (レースの恐怖)”を、Welland は、“the yacht-race (ヨット・レース)”の恐怖でもあり、“human race (人間)”の恐怖でもある、としている。⁽⁵⁾ヨット・レースは暴虐な悪意を持つ海によって恐怖の世界にたたき込まれ、ヨットを操る人間は残酷な自然の力によって恐怖の世界にひきずり込まれるのである。ここでも、2行目の“entanglement (混乱)”という多音節語が、リズムの上からも意味の上からも、大きな効果を生んでいる。

3行目末の鋭い響きを持つ“Broken”という語が、次の第11連の冒頭の“beaten”へと、音の上からも関係を持ちながらつながっていき、この連でこの詩は終る。死と恐怖の世界から必死に逃れようとする人々。波間からの叫び声。そして、その中を、「巧みなヨットは通り過ぎていく (the skillful yachts pass over)」のである。この最後の行で、それまでの死と恐怖の恐ろしい世界がふと遠ざかり、もとの華やかなヨット・レースの世界が蘇ってくる。

ウィリアムズは、ヨット・レースという平和で華やかな世界の内にひそんでいる恐怖の世界を、見据えているのである。

この“The Yachts”に関して、Jarrell は、これをウィリアムズの最上の詩

の一つであるとし、Gregory は、当時の最もすばらしい詩の一つで、ウィリアムズの詩の中でも密度の高い作品だと述べている。⁽⁶⁾⁽⁷⁾

この詩の形式は、ダンテが『神曲』で用いた *terza rima* を模したものと言われている。*terza rima* は、3行の連から成り、各行は弱強5詩脚で、押韻は aba, bcb, cdc……の詩形である。ウィリアムズは、習作時代にはキーツに惹かれたりして伝統的な形式を重んじたが、後にイマジズムその他の影響もあって、実験的、尖鋭的になり、伝統的なものに逆らって反詩的な詩作を行ない、独自の境地に達した。その彼が、この時代に、伝統を模したことは興味深い。もちろん、詩脚も押韻も厳密なものではなく、ウィリアムズ独自のものにはなっているが、Gregory は、ウィリアムズがこの形式を完全に自分自身のものにしていると述べ、さらに、この時代のいわゆる「伝統的な」詩人のだれ一人として、ウィリアムズがこの詩でやったほど確信をもって、伝統的な形式にのっとったものはいない、としている。⁽⁸⁾

“The Red Wheelbarrow”などにみられるような、あらゆる夾雑物をはぎ取って極限にまで達する即物的な世界とは違って、“The Yachts”には、物語風な豊潤な世界がある。美しく華やかなヨットと、恐ろしい残虐性を密かに抱く海が、叙述的にのびやかに描かれている。

しかし、一見他の作品とは趣を異にするこの作品にも、ウィリアムズ独自の世界がある。ウィリアムズは、対象となる事物に強烈な集中力を注ぎ、その事物そのものを描写する。「事物の中、そこ以外には思想はない」という彼の言葉⁽⁹⁾が示すように、事物そのものの存在が問題なのであり、観念や情緒を事物に託して表わすことを、ウィリアムズは拒否する。この詩の場合にも、「ヨット」や「海」が何かを象徴しているわけではない。「ヨット」はあくまでもヨットであり、「海」はあくまでも海である。美しく華やかなヨットが競い合うヨット・レース。ウィリアムズは、この風景の中で、「ヨット」や「海」に強烈な集中力を注ぎ、そこにひそむ恐怖の世界をえぐり出す。ヨット・レースというある一つのものにひそむ恐怖の世界を見せることによって、一見のどかなあらゆる日常生活の奥にひそむ恐怖の存在を示しているのである。これは、ウィリ

アムズの言う「個別的なものから出発して、それを普遍的なものにする⁽¹⁰⁾」という基本的な態度の現われである。

注

- (1) 本稿のテキストとしては、Williams, Carlos Williams. *The Collected Earlier Poems*. New York : New Directions Publishing Co., 1966. を使用した。
- (2) この詩については、すでに「ウィリアム・カーロス・ウィリアムズの “At the Ball Game” について」(『明治大学教養論集・英米文学』, 通巻 153 号, 1982 年) で考察した。
- (3) Dennis Welland, “The Dark Voice of the Sea”, *American Poetry*, ed. Irvin Ehrenpreis (London : Edward Arnold Ltd., 1965), p. 206.
- (4) *ibid.*, p. 207.
- (5) *Loc. cit.*
- (6) Randall Jarrell, “Introduction”, *Selected Poems*, William Carlos Williams (New York : New Directions, 1969), p. xviii.
- (7) Horace Gregory, and Marya Zaturenska, *A History of American Poetry, 1900-1940* (New York : Gordian Press, 1969), p. 212.
- (8) *ibid.*, p. 213.
- (9) “Paterson”
- (10) *Paterson*